

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2022

「しなやかに生きる ～大学は知の宝庫～」

第1回 10/4 (火) 13:30～15:00 報告

持続可能な社会を目指して ～アフリカ・ルワンダ～

講師 デュアー 貴子 (本学教授)

於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*◆◆◆*

今回の講座では、2015年9月の国連総会にて2030年までに全ての人が達成すべき持続可能な開発目標 (SDGs) として17の世界的な目標が採択され示されたことに関連して、人類が今までどの様に環境破壊に関わってきたのか、その簡単な歴史を振り返りながら、具体的な例としてアフリカ・ルワンダ共和国でジェノサイド前後から現在に至るまでの様子など多岐にわたって詳しくお話ししていただきました。その上で我々が今すぐSDGsに取り組むことの大切さや、今後どのように取り組んでいったらよいのかなどを東海学院大学学生の関わりも多少交えながら講演していただきました。

最初に、環境破壊の歴史について非常に興味深いお話をしていただきました。

我々人類が行ってきた環境破壊の起源は古く、古代4大文明の一つメソポタミア文明が栄えた頃までさかのぼり、このころにはすでに人口が集中し都市が形成され、そこに暮らす人々の食料を満たすためには新たに農耕地の開発が必要でした。そのため、人々が暮らす都市の周辺では森林の伐採すなわち環境破壊が始まっていたと考えられています。

この事は、古代メソポタミア時代に書かれ、現存する最古の叙事詩といわれているギルガメシュ叙事詩に人類史上最も古い森林破壊の例として記載されています。

この物語の内容は、当時の都市国家ウルク市の王ギルガメシュが人々の幸せのため、森の守り神フンババを退治して森林を伐採、近代都市国家の建設を進めたというものですが、一方で、人類史上最初の森林破壊を進めた事を書いた物語としても注目されています。この物語で登場する良質なレバノン杉の乱伐はその後も続き、今では保護によりかろうじて残すのみになっています。今後、この乱伐された森林の再生には多くの歳月を必要とすることが判っています。その後、18世紀になると、イギリスから始まる産業革命による急速な進歩と発展は人々に多くの恩恵をもたらすと同時に多くの環境破壊を今まで以上の速さで推し進める結果となります。これについては、ドイツにある広大な森シュヴァルトヴァルト (黒い森) において発生し、その後、周辺諸国まで広がる酸性雨による森林破壊を具体的な例の一つとして紹介していただきました。やがて1970年代になると、環境破壊の実態は人工衛星によってより明らかになっていきます。この様に人類が今まで繰り返してきた環境破壊について、古代の歴史から近代の具体的な例にも触れながら講演していただきました。

続いて、人口の急速な増加が環境破壊に及ぼす影響についても具体的に講演していただきました。

世界人口は1950年代頃から急速に増加しはじめています。今後もアフリカ、インド、東南アジア、中南米などの途上国では人口の著しい増加が予想されており、2022年中に80億人に達する見込みの人口は、今世紀末には110億人に達するとの報告もあります。

歴史上、人口の増加は農地開発による食糧確保のため森林伐採を促し、やがては気候変動による自然災害や土地の荒廃をもたらす結果となっています。このことに関連して、特にアフリカのサヘルと呼ばれている地域に注目してお話ししていただきました。サヘル地域とはアラビア語で岸辺や沿岸を意味し、サハラ砂漠の南側を大西洋から紅海まで帯状に広がる広大な地域をさします。かつては自給自足が出来、豊かで平穏な暮らしを送っていましたが、1950年以降は人口が急増、さらに地球温暖化の影響もあって、1970年前後から今までに経験したことのない深刻な干ばつに繰り返し見舞われた結果、非常に多くの人々が飢餓等により命を落とすに至った地域です。スーダンにあるハルツーム大学によりますと、飢餓や干ばつは環境破壊による生態系の崩壊が原因と考えられています。この様に、この地域一帯では貧困や飢餓、干ばつなど数多くの深刻な問題を抱えていましたがようやく、1984年国連食糧農業機関（FAO）による調査が行われ、その結果、アフリカの52%の国々が飢餓状態であることがわかり、飢餓や貧困撲滅のための援助が開始されています。

これらのアフリカ全体で抱える問題については、今回は特に中央アフリカに位置するルワンダ共和国に注目してお話ししていただきました。ルワンダ共和国は牧畜民であるツチ族と農耕民であるフツ族に分けられますが、1899年から続いたドイツ領から1919年ベルギー領になった後、統治のしやすさから、単なる顔立ちにより両民族に分けられたいきさつがあります。ベルギーは当初ツチ族を優遇し、かわりにフツ族を隔て民族を分断していきます。その後、ルワンダ共和国では1950年代から人口の急増が始まり1994年にジェノサイドが起きる頃までに人口は4倍程度まで膨れ上がります。この間、農地不足、食料不足から農耕民であるフツ族による農地開拓のための森林破壊が繰り返されます。その結果、ジェノサイド直前には国立公園以外の森林がなくなるほどとなり、大規模な土壌流出を引き起こす原因となったりもします。さらに都市への人口集中による失業者の増加、治安や経済状態の悪化等から絶対的貧困層（1990年当時の定義で1ドル/1日以下の収入）の割合がジェノサイド直前には全国民の75%程度まで占める結果となりました。一方、第二次大戦以降、多数派であったフツ族が政権を握ると、ツチ族は近隣の国々へ逃れ難民化すると同時に祖国への返り咲きを願いRPF（ルワンダ愛国戦線）として組織化していきました。その後、1994年にフツ族のハビヤリマナ大統領がRPFにより暗殺されたのを契機にフツ族がツチ族等を短期間に大量虐殺するジェノサイドがおきます。ジェノサイドから逃れようとする人々が近隣諸国の難民キャンプ周辺において食料不足を補うため、森林伐採や貴重な動物であったカバやマウンテンゴリラ、ライオン等を捕獲しました。このような悲劇の後、2000年にポールカガメ大統領が就任し、その手腕もあって、今では奇跡的な復興を成し遂げようとしています。

今回は、学生がルワンダ共和国での健康調査や栄養調査をする際に交流がある学校についても詳しく紹介していただきました。ルワンダ共和国では、いまだに多くの生徒は1日

に 1 食程度摂れば良い方で体調不良となる子も多く、この厳しい現状を政府関係者に報告し、更なる支援が必要と訴えた結果、ようやく 2022 年に給食室が出来ましたがまだまだ不十分な状態です。大統領も経済発展や学費の小中高無償化など教育改革にも取り組んでいますが食糧事情はなかなか良くならないというのが現状です。昨今のコロナ禍でさらに悪化しています。

1960 年代までは豊かな農業国であったルワンダ共和国が食糧事情の悪化や環境破壊を端に発して 1994 年のジェノサイドを招き、その後の復興から現在のルワンダ共和国の様子に至るまでの複雑な歴史的背景、東海学院大学の学生による支援等も交えながらの講演は非常に興味深く、今まで比較的なじみの薄かったルワンダ共和国に対して身近に感じる事が出来ました。

講演時間も残り少なくなってきましたが、最後に同じアフリカでルワンダ共和国の比較的近くに位置するケニア共和国では、1970 年代から長年にわたりグリーンベルト運動（植林）を続け、その後ノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイ氏が 2005 年に来日した際に、日本語の MOTTAINAI という言葉に感銘し、その後 MOTTAINAI 運動をひろめられました。日本にはこういった MOTTAINAI 精神があります。

SDGs 達成目標の 2030 年はすぐそこに迫ってきており、どんなに小さなことからでもよいので一人一人が今すぐに取り組み、そして持続する姿勢がより重要であると訴えられました。

講演後には多くの方々が質問等に演台の方に来られ、聴衆の皆さんの SDGs 達成への関心の高さを体感することも出来ました。

【講座の様子】

